



現代名作集
(一)

日本文学全集 63

日本文学全集 **63** 現代名作集(一)

昭和四十五年十一月一日発行

著者
代表 中村星湖

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

現代名作集(一) 目次

山田美妙

武蔵野……………五

齋藤綠雨

かくれんぼ……………六

川上眉山

書記官……………三

廣津柳浪

今戸心中……………五

小杉天外

初すがた……………三

寺田寅彦

団栗・竜舌蘭・花物語……………六

伊藤左千夫

野菊の墓……………一六

鈴木三重吉

千鳥……………二〇

三島霜川

解剖室……………三七

中村星湖

少年行……………二四

眞山青果

茗荷畑……………三三

小栗風葉

世間師……………三九

長田秀雄

歡樂の鬼……………三三

岡本綺堂

修禪寺物語……………三七

木下杢太郎

和泉屋染物店……………六一

年譜……………六〇

解説……………吉田精一 六九

長田幹彦

零落……………三九

田村俊子

木乃伊の口紅……………四六

上司小劍

鱧の皮……………四四

現代名作集
(一)

武蔵野

山田美妙

上

此武蔵野は時代物語ゆゑ、まだ例は無いが、その中の人物の言葉をば一種の体で書いた。此風の言葉は慶長頃の俗語に足利頃の俗語とを交ぜたものゆゑ大概其時代には相応して居るだらう。

あゝ今の東京、むかしの武蔵野。今は雖も立てられぬ程の賑はしさ、昔は閑も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨付けられる鳥も昔は海辺四五町の漁師町でわづかに活計を立てて居た。今柳橋で美人に拝まれる月も昔は「入るべき山もなし」、極の素寒貧であつた。実に今は住む百万の蒼生草、実に昔は生えて居た億万の生草。北は荒川から南は玉川まで、嘘も無い一面の青舞台で、草の樂屋に虫の下方、尾花の招引につれられて寄来る客は狐か、鹿か、又は兎か、野馬ばかり。此様な処にも世の乱とて是非もなく、此頃軍があつたと見え、其処此処には腐れた、見るも情無い死骸が数多く散つて居るが、戦国の常習、それを葬

つてやる和尚もなく、たゞ処々にばかり、退陣の時にでも積まれたかと思える死骸の塚が出来て居て、それには僅に草や土や又は散れて血だらけになつて居る陣幕などが掛かつて居る。其外はすべて雨ざらしで鳥や獣に食はれるのだらう、手や足が干切れて居たり、また記標に取られたか、首さへも無いのが多い。本当に是等の人々にもなつかしい親もあらう、可愛らしい妻子もあらう、親しい交りの友もあらう、身を任せた主君もあらう、それであつて此ありさま、刃の串につんざかれ、矢玉の雨に碎かれて異域の鬼となつてしまつた口惜しさはどれ程だらうか。死んでも誰にも祭られず……故郷では影膳をすゑて待つて居る人もあらうに……「ふる郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我をまつらむ」……露の底の松虫もろとも空しく怨に咽んで居る。それならそれが生きて居た内は榮華をして居たか。なかなか左様ばかりでも無い世が戦国だもの。武士は例外だが。只の百姓や商人など鋤鋤や帳面の外はあまり手に取つた事も無いものが「サア軍だ」と駈集められては親兄弟には涙の水杯で暇乞。「しかたが無い。これ、倅、死人の首でも取つて胡麻化して功名しろ」と腰に弓を張る親父が水鼻を垂らして軍略を皆伝すれば、「あぶなかつたら人の後に隠れてなるだけ早く逃るがいよ」と兎の緒を緊めてくれる母親が涙を嚙交せて忠告する。ても耳の底に残るやうに懐かしい声、目の奥に止まるほどに昵しい顔をば「左様ならば」の一言で聞捨て、見捨て、さて陣鉦や太鼓に急

立てられて修羅の街へ出掛ければ、山奥の青苔が褥となつたり、河岸の小砂利が襖となつたり、その内に……敵が……そら、太鼓が……右左に大将の下知が……そこで命が無くなつて、跡は野原でこの有さまだ。死ぬ時にはさぞ麗いたらう。さぞ死ぬまいと齒をくひしばつたらう。血は流れて草の色を変へて居る。魂も亦身体から居処を変へて居る。切裂かれた疵口からは怨めしさうに臟腑が這出して、其上には敵の余類か、金づくり、薄金の鎧をつけた蠅將軍が陣取つて居る。はや乾いた眼の玉の池の中には蛆大將が勢揃。勢よく吹くのは野分の横風……変則の匂囊……血腥い。はや下哺だらう、日は函根の山端に近寄つて儀式どほり茜色の光線を吐始めると末野は些しづ、薄樺の隈を加へて、遠山も、毒でも飲んだか段々と紫になり、原の果には夕暮の蒸発気が切りに逃水をこしらへて居る。頃は秋。其処此処我儘に生えて居た木も既に緑の上衣を剥がれて、寒いか、風に慄へて居ると、旅婦の椋鳥は慰顔にも澄まし切つて囀つて居る。処へ大層急足で西の方から歩いて来るのはわづか二人の武者で、いづれも旅行の体だ。

一人は五十前後だらう、鬼髯が徒党を組んで左右へ立別かれ、眼の玉が金壺の内ぐるわに楯籠り、眉が八文字に陣を取り、唇が大土堤を厚く築いた体、それに身長が櫓の真似して、筋骨が暴馬から利足を取つて居る塩梅、どうしても時世に恰好の人物、自然淘汰の網の目をば第一に脱けて生残る逸物と見えた。その打扮はどんなだか。身に着いた

のは浅紺に濃茶の入った具足で威もよほど古びて見えるが、ところどころに残つて居る血痕が持主の軍馴れたのを証拠立て、居る。兜は無くして乱髪が薬で括られ、大刀疵が幾許もある臘色の業物が腰へ反返つて居る。手甲は見馴れぬ手甲だが、実は濃菊が剝がれて居るのだ。此体で考へればどうしても此男は軍事に馴れた人に違無い。

今一人は十八九の若武者と見えただけれど、鋼鉄の厚兜が大概顔を匿して居るので十分にはわからない。しかし色の浅黒いのと口に力身のある処でざつと推して見れば是も屹とした面体の者と思はれる。身長は酷く大きくも無いのに、具足が非常な太胴ゆゑ、何となく身の横幅が釣合わるく太く見える。具足の威は濃藍で、魚目は如何にも堅さうだし、そして胴の上縁は離山路で簡単囲まれ、その中には根笹のくづしが打たれてある。腰の物は大小ともに中々見事な製作で、鐔には、誰の作か、活々とした蜂が二疋ほど毛彫になつて居る。古いながら具足も大刀もこのとほり上等な処で見ると此人も雑兵では無いだらう。

此頃のならひとて此二人が歩行く内にも四辺へ心を配る様子は中々泰平の世に生まれた人に想像されない程であつて、茅萱の音や狐の声に耳を側てるのは愚なこと。すこしでも人が踏んだやうな痕の見える草の間などをば軽々しく歩行かない。生きた兎が飛出せば伏勢でも有るかと刀に手が掛かり、死んだ兎が途にあれば敵の謀計でもあるかと腕がとりしばられる。其頃はまだ純粹の武蔵野で、奥州街道

は僅に隅田川の辺を沿ふてあつたので、中々通常の者で只今の九段あたりの内地へ足を踏込んだ人は無かつたが、その些^い前の戦争の時には此高^{たか}処へも陣が張られたと見えて、今此二人が其^{その}辺へ来掛かつて見回すと千切れた幕や兵糧の包が死骸と共に遠近に飛散つて居る。この体に旅人も首を傾けて見て居たが、やがて年を取つた方が徐に幕を取上げて紋処をよく見ると是は実に間違無く足利の物なので思はずも雀躍した。「見なされ。是は足利の定紋ぢや。はて心地よいわ。」と言はれて若いのも点頭て、

「左様ぢや。酷い有様でおじやるわ。あの先年の大合戦の跡でおじやらうが、跡を取収める人も無くて……」。

「女々しいこと。何でおじやる。思出しても二方^{ふたかた}（新田義宗と義興）の御手並、さぞな高氏^{たかうぢ}づらも身戦^{みいくさ}をしたらうぞ。あの石浜で追詰められた時いたう見苦しくあつてぢや」。

「は、御主、其時の軍に出なされたか。耳よりな……語りなされよ。」

「語り申さうぞ。たゞし物語に紛れて遅れては面目なからう。翌日頃は何も決めて鎌倉へいでもしなさらうに……後^{あと}れては……」。

「それも左様ぢや。左様でおじやる。さらば物語は後に為されよ。兎に角この敗軍の体を見ればいと心も引立つわ。」
「引立つわ、引立つわ、糸の様に引立つわ。和主も是から見参して毎度手柄をあらはしなされよ」。

「是からは亦新田の力で宮方も勢を増すでおじやる。楠や

北畠が絶えたは惜しいが、また二方が世に秀れておじやるから……」。

「嬉しいぞや。早う高氏づらの首を斬りかけて世を元弘の昔に復したや」。

「それは言はんでもの事。如何ばかりぞ其時の嬉しさは」。是でわかつたこの二人は新田方だと。そして先年尊氏が石浜へ追詰められたとも言ひ、また今日は早く鎌倉へ是等二人が向つて行くと言ふので見ると、二人とも間違無く新田義興の隊^{たい}の者だらう。応答の内にはいづれも武者気質の凛々しい処が見えて居たが、比合はせて見ると若いのは年を取つたのよりまだ軍にも馴れないので血腥気が薄いやうだ。

それから二人は今の牛ヶ淵あたりから半蔵の壕あたりを南に向つて歩いて行つたが、其頃はまだ、此辺は一面の高台で、はるかに野原を見通せる処から二人の話も大抵四方の景色から起つて居る。年を取つた武者は北東に見えるかたそぎを指さして若いのに向ひ、

「誠に広いではおじやらぬか。何処^{いづく}を見ても原ばかりぢや。和主などはまだ知りなざるまいが、それ那^{あの}処のかたそぎ、喃^{なん}あれが名に聞ゆる明神ぢや。その、また、北東には浜成たちの観世音があるが、此処からは草で見えぬわ」。

「浮評に聞える御社はあの事でおじやるか。見れば太う小さなものぢや」。

「あの傍ぢや、己^{おれ}が、誰やらん逞ましき、敵の大将の手に

衝入ッて騎馬を三人打取ツたのは。その大将め、はるか對方に栗毛の逸物に騎ッて扣へてあつたが、己の働を心にくく思ひつらう、「あの武士、打取れ」と金切声立てゝをツた。」「はゝゝゝ、嘸御感に入りなされたらう、軍が終ッて。身に疵をば負ひなされたか」。

「四ヶ所負ひたがいづれも薄手であつた。逆もあの様な乱軍の中では無疵であらう者はおじやらぬ。勿論原で戦ふのぢやから、敵も味方も其時は大抵騎馬であつた。が味方の手綱には大殿（義貞）が仰せられたまゝ、金鍾が縫込まれてあつたので手綱を敵に切離される掛念は無かつた。其時の二の大将（義興）の打扮は目覚ましい物でおじやつたぞ。」

「一の大将（義宗）もおじやつたらう」。

「おじやつた。この方もおなじ様な打扮ではおじやつたが、具足の威が些濃かつたゆゑ、二の大将ほど目立ちなさらかつた」。

折から草木を烈しく揺ッて野分の風が吹いて来た。野原の急な風……それは中々想像の外で、見る間に草の茎や木の小枝が砂と一途にさながら鳥の飛ぶやうに幾万となく飛立ツた。そこで話もたちまち途切れた。途切れたか、途切れないかつたか、風の音に吞まれて、わからないが、先は確に途切れたらしい。此間の応答の有様に就いてまたつらつら考へれば年を取ツた方は中々経験に誇る体が有ツて、若いのはすこし謹深い様に見えた。左様でしやう、読者諸君。其内に日は名残無くほとんど暮掛かつて来て雲の色も薄

暗く、野末も段々と霞んで仕舞ふ頃、変な雲が富士の裾へ腰を掛けて来た。原の広さ、天の大きさ、風の強さ、草の高さ、いづれも恐ろしい程に苛めしくて、人家は何処か些しも見えず、時々にはるか對方の方を馳せて行く馬の影がちらつくばかり、夕暮の淋しさは段々と脳を囓んで来る。「宿るところもおじやらぬ暗」。「今宵は野宿するばかりぢや」。「急がうぞ」。「急ぎやれ」。是だけの応答が幾度も試験を受けた。

「馬が走るわ。捕へて騎らうわ。和主は好みなさらぬか」。「それ面白や。騎らうぞや。すはや這方へ近づくとよ」。

二人は馬に騎らうと思ツて、近づく群をよく視れば是は野馬の簇では無くて、大変だ、敵、足利の騎馬武者だ。

「はッし、ぬかつた、気が注かなかつた。馬ぢや……敵ぢや……敵の馬ぢや」。「敵は多勢ぢや、世良田どの」。「味方は無勢ぢや、秩父どの」。「さて……」「思はぬ……」敵はまだかく近寄ツた。

「動くな、落武者。知らぬか、新田義興は昨日矢口で殺されてぢや」。

「なに、二の君が」。

「今更知ツたか、覚悟せよ」。

跡は降ツた、劍の雨が。草は貫ツた、赤絵具を。淋しさに生出る新月の影。くやしさに吹く野の夕風。

「山里は冬ぞさみしさまさりける、人目も草もかれぬと思へば」。秋の山里とてその通り、宵ながら凄いに淋しい。衣服を剥がれたので、瘦脇に癢を立てゝ居る柿の梢には冷笑顔の月が掛かり、青白く冴えわたった地面には小枝の影が破隙を作る。はるかに狼が凄味の遠吠を打込むと谷間の山彦がすかさずそれを送返し、望むかぎりには狭霧が朦朧と立込めてほんの特許に木下闇から照射の影を惜しさうに泄らし、そして山気は山嵐の合方となつて意地わるく人の肌を噛んで居る。さみしさ凄さは是ばかりでも無くて、曲りくねつたさも悪徒らしい古木の洞穴には梟があの怖らしい両眼で月を睨みながら宿鳥を引裂いて生血をばた／＼……崖下にある一樁の第宅は郷士の住処と見え、よほど古びては居るが、骨太く粧飾少く、夕顔の干物を衣服とした小柴垣がその周囲を取巻いて居る。西向の一室、その前は植込で、色々々木がきまりなく、勝手に茂つて居るが、その一室は此処の家族が常に居る室だらう、今も其処には二人の婦人が……

けれど先第一に人の眼に注まるのは夜目にも鮮明に若やいで見える一人で、言はずと知れた妙齡の処女。燈火は下等の蜜燭で作られた一里一寸の松明の小さいのだから四辺どころか、燈火を中心として半径が二尺ほどでだゞつた処には一切闇が行亘つて居るが、しかし容貌は水際だつて居るだけに十分若い人に見える。年頃はたしかに知れないが眼鼻や口の権衡がまだよくしまつて居ない処で考へれば酷

く長けても居ないだらう。その癖に坐丈は中々あつて、そして(少女の手弱に似ず)腕首が大層太く、その上に人を見る眼光が……眼は眼目縁を持つて居ながら……、難を言ば、凄いい……でもない……やさしくない。たゞ肉が肥えて腿にやはらかい段を立たせ、眉が美事で自然に顔を引立たせたのでやゝ見処が有るやうに見える。その些し前までは白菊を摺箔にした上衣を着て居たが、今はそれを脱いでただ蒲の薄綿が透いて見える葛の衣服ばかりで居る。

之と対合つて居るのは四十前後の老女で、是も着物は葛だが柿染の古ぼけたので、何うしたのか砥粉に塗れて居る顔形、それは老若の違こそはあるが、ほと／＼前の婦人と瓜二つで……ちと輕卒な判断だが、だから此二人は多分母子だらう。

二人とも何やら浮かぬ顔色で今迄の談話が途切れたやうな体であつたが、少焉して老女は屹と思付いた体で傍の匕首を手を取上げ、

「忍藻、和女の物思も道理ぢやが……此母とていたう心には掛かるが……さりとて、こや其様に、忍藻太息吐くやうでは、太息のみ吐いて居るやうでは武士……実よ、世良田三郎の刀禰の内君には……聞けよ、此母の言葉を、見よ、この母の衣を。和女はよも忘れは為まい、和女には実の親己には実の夫のあの民部の刀禰が這回二の君の軍に加はつて、天晴世を元弘の昔に復す忠義の中に入らうとて、世良田の刀禰もろとも門出した時、己は、こや忍藻、己は何し

て何言ふたぞ。己が手づから本磨に磨上げた南部鉄の矢根を五十筋、各自へ廿五筋、喃喃門出の祝と差出して、忍藻聞けよ——『二方の中の誰方でも前櫓で敵を引受けなさるならこの矢根に鼻油引いて、兜の金具の目欲しいを附居るを打止めなされよ。また殿で敵に向ひなさるなら、鹿毛か、葦毛か、月毛か、栗毛か、馬の太く逞しきに騎つた大將を打取りなされよ。婦人の甲斐なさ、それよ忠義の志ばかりでおじやるわ』。と此眼から張切れうづる涙を押へて……お、己は今泣いては居ぬぞ、忍藻……己も武士の妻あたに夫を励まし、聲を急いたぞ。それを和女、忍藻も見ておじやツたらうぞ喃。武士の妻のころばえは斯程無うてはならぬわ。さればこそ今日までも休まず、夫と聲とは家には居らぬが、己が矢根を日々磨澄まして、おなじ忠義の刀禰たちに与ふるのぢや。かう衣は砥粉に塗れても中々にうれしいぞ、然すれば……

「まことよ。仰は道理におじやる。妾とてなど……」。

「心から左なら此母もうれしいわ。見よ、喃、この匕首を。門出の時、世良田の刀禰が和女に此を残して再会の記念と為されたらうよ。それを見たらよしな、女々しい心は、刀禰に対して出されまい。和女とて一旦は武芸をも習ふたのに、近くは伊賀局ななどを亀鑑となされよ。人の噂には色々の詐偽もまじはるものぢや。軽々しく信ければ後に悔ゆることもあらうぞ」。

言切つて母は返辞を待良に忍藻の顔を見詰めるので忍藻

も仕方なさきうに、挨拶したが、それも僅に一言だ。
「さも然うず」。

母も覚束ない挨拶だと思ふやうな顔付をして居たが流石に猶強ひてとも言難ね、やがてやゝ傾いた月を見て、
「夜も更けた。さらば己は是から看経せうぞ。和女は思ひのまに——寐よ」。

忍藻がうなづいて礼を為したので母もそれから座を立つて縁側伝に奥の間へやう／＼行ツた。跡に忍藻はたゞ一人起ツて行く母の後影を眺めて居たが、しばらくして、こらへこらへた溜息の壠が一度に切れた。

話の間だが一寸茲で忍藻の性質や身上が稍詳細に述べられなくてはならない。実に忍藻はこの老女の実子で、父親は秩父民部とて前回武蔵野を旅行して居た旅人の中の年を取つた方だ。そして旅人の若い方はすなはち世良田三郎で、母親の話でも大抵わかるが、忍藻にはすなはち夫だ。

此三郎の父親は新田義貞の馬の口取で藤島の合戦の時主君とともに戦死をして仕舞ひ、跡には其時二歳になる孤子の三郎が残つて居たので民部もそれを見て不慙に思ひ、引取つて育てる内に二年の後忍藻が生まれた。処が三郎は成長するに従つて武術にも長けて来て、中々見処のある若者となつたので養父母も大きに悦び、そこでそれを終に娘の嫁にした。

其時三郎は十九で忍藻は十七であつた。今から見ればあまりな早婚だけれど、昔は其様なことには些しも構なかつ

た。

それで若夫婦は中よく暮して居たところが、不図聞ば新田義興が足利から呼ばれて鎌倉へ入るとの噂があるので血氣盛の三郎は家へ引籠もつて軍の話を素聞にして居られず、舅の民部も南朝へは心を傾けて居ることゆゑ、難なく相談が整つてそれから二人は一途に義興の手に加はろうとて出立し、竟に武藏野で不思議な危難に遇つたのだ。その危難にあつた事が精密ではないが、薄々は忍藻にも聞えたので、さアそれが忍藻の心配の種になり、母親をつかまへて鬱出すので其処で前のとほり母親もそれを論して励まして居た。「門前の小僧は習はぬ経を誦む」。鍛冶屋の嫁は次第に鉄の産地を知る。三郎が武術に骨を折るありさまを朝夕見て居るのみか、乱世の常として大抵の者が武芸を収める常習になつて居るので忍藻も自然太刀や薙刀の事に手を出して来ると、従つて挙動も幾分か雄々しくなつた。手首の太いや眼光のするどいのは全くそのためだらう。けれど今あからさまに其性質を言はうなら、なる程忍藻はかなり武芸に達して、一度などは死掛かつて居る熊を生捕にしたとて毎度自慢が出たから、心も十分猛々しいかと言ふに全く左様でもない。その雄々しく見えるところは只時々身の挙動と言葉の有様にあつたばかりで、その婦人に固有の性質は（殊に心の教育のない婦人に固有の性質は）跡を絶つては居ない。たしかに無くなつては居ない。

母が立去つた跡で忍藻は例の匕首を手に取上げて拔離し、

しばらくは氷の光を瞻詰めて屹とした風情であつたが、また其下から直に溜息が出た。

「匕首、この匕首……さきにも母上が仰せられた如くあの刀禰の記念ちやが……さても是を見ればいと猶……そも刀禰たちは鎌倉まで行着かれたか、無難に。太う武芸に長けておじやるから思遣るも女々しけれど……心に掛かるは先程の人々の浮評よ。狭い胸には持兼ねて母上に言出づれば、あれほどに心強うおじやるよ。看経も時に因るわ、この分難い最中に、何事ぞ、心のどけく。そも此身の夫のみの御身の上では無くて現在母上の夫さへもおなじ様でおじやるのに……扱も扱も。武士の妻は箇程無うてはと仰せられても此身にはいかでか。新田の君は足利に計られて矢口とやらんで殺されてその手の者は一人も残らず……ああ胸ぐるしい浮評ぢやわ。三郎の刀禰は、然うよ、父上も其処を逃れなされたか。門出の時この匕首を此身に下されて「喃、忍藻、おことゝ己とは一方ならぬ縁で……やがて己が功名して帰らう日は何時ぞとはよう知れぬが、和女も並々の婦人に立超えて心ざまも女々しうおじやらぬから由ない物思をばなさるまい。その時までの記章には己が秘蔵のこの匕首（これには己の精神もこもるわ）匕首を残せば和女も是で煩惱の羂をば喃……なみだは無益ぞ」と目頃から此身は我ながら雄々しくして居るに、今日ばかりは如何にして斯う胸が立騒ぐか。別離の時の御言葉は耳にとまつて……拔離せばこの凄業もの……発矢、なみだの顔が

映るわ。この涙、あゝら此身の心はまだ左程弱うはなるまいに……涙ばかりが弱うて……昨夜見た怖い夢は……あゝ思入ればいと猶胸は……胸は湧起つわ。矢口とや、矢口は何処ぞ。翼さへあらば箇程には……」。

思入つてはこらへかねて坐に涙をもよほした。無論荒誕の事を信ずる世の人だから夢を氣に掛けるのも無理では無い。思へば思ふほど考は遠くへ走つて、それでなくても中強い想像力が一入跋扈を極めて判断力をも殺いた。早くここでその熱度さへ低くされるなら別に何のこともないが、中々通常の人には其様に自由なことはたやすく出来ない。不思議さ、忍藻の眼の中には三郎の儚が第一にあらはれて次に父親の姿があらはれて来る。青ざめた姿があらはれて来る。血、血に染みた姿があらはれて来る。垣根に吹込む山おろし、それも三郎たちの声に聞える。ポーン惱と鳴る遠寺の鐘、それも無常の兆かと思はれる。

人に見られて、物思に沈んで居ることを悟られまいと思つて、それから忍藻は手近にある古今集を取つて宜加減な処を開き、それへ向つて字をば読まずに、いよ／＼胸の中に物思の虫をやしなつた。

「題知らず……躬恒……貫之……つかはしける……女のもとへ……天津かりがね……」。おゝ我知らず読んだか。それにつけても未練らしいかは知らぬが、門出なされた時から今日までは快七日ぢやに、七日目にかう胸がさわぐとは……打出せば愚痴めいたと言はれ……おゝ雁よ。雁を見

てなげいたといふ話は真に……雁、雁は翼あつて……喃。」だが身最負で、猶幾分か、内心の内心には（このやうな独語の中でも）「まさか殺されは為まい」の推察が虫の息で活きて居る。それだのに涙腺は無理に門を開けさせられて熱い水の堰をかはせた。

この儘でやゝ少焉の間忍藻は全く無言に支配されて居たが、其の内に破裂した、次の一声が。

「武芸はそのため」。

その途端に燈火は弗と消えて跡へは闇が行亘り、燃さした跡の火皿が暫時は一人で見々。

下

夜は根城を明渡した。竹藪に伏勢を張つて居る村雀はあらたに軍議を開初め、闇の隙間から研込んで来る暁の光は次第に四方の闇を追退け、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇る。「夜ははやあけたよ。忍藻はとくに起きつらうに、まだ声をも出ださぬは」。訝りながら床をはなれて忍藻の母は身繕し、手早く口を漱いて顔をあらひ、黄楊の小櫛でしばらく髪をくしけづり、それから部屋隅にかゝつて居る竹筒の中から生蠟を取出して火に焙り、切りにそれを髪毛に塗りながら。

「忍藻いざ早う来よ。蠟銚けたぞや。和女も塗らずか」。

けれど一言の返辞も無い。

「忍藻よ、おしもよ、いぎたなや。秋の夜長に……こや忍

「藻」荒爾わらツて口の裡、「昨夜は太う軍のことに胸なやませて居た体ぢやに、さても此処ぞまだ児女ぢや。今はかほど迄に熟睡して、さばれ、いざ呼びさう」。

忍藻の部屋のを明けて母ははッとおどろいた。承塵にあツた薙刀も、床にあツた鑲帷子も、無論三郎が呉れた匕首も四辺には影も無い。「すはや己がぬかツたよ。常より物に凝るならひ……如何にも怪しい体であツたが、さても己は心注ぎながら心せなんだ愚さよ。慰言を聞かせたが猶も猶おもひなびて脱出でたよ。あゝら由々しや、由々しいことぢや」。

心の水は沸立ツた。それ朝餉の籠を跡に見て跡を追ひに出る庖廚の炊婢。サア鋤を手に取ツたまゝ尋ねに飛出す煙の僕。家の中は大騒動。見る間に不動明王の前に燈明が点き、たちまち祈禱の聲が起る。をしく見たが流石は婦人母は今更途方にくれた。「なまじひに心せぬ体でなぐさめたのが己の脱落よ。さてもあの儘鎌倉まで若しは追ふて行いたか。いかに武芸をひとわたりは心得たとて……この血腥い世の中に……たゞの女の一人身で……たゞの少女の一人身で……夜をもいとはず一人身で……」。

思へば憎いやうで、可哀さうなやうで、また悲しいやうで、くやしいやうで、今日はまた母が昨夜の忍藻になり、鳥の聲も忍藻の聲で誰の顔も忍藻の顔だ。忍藻の部屋へ入ッて見れば忍藻の身の香がするやうだし、忍藻の手匣へ眼をとめれば忍藻が側に居るやうだ。「胸は騒ぐに何事ぞ」。

早く大聖威怒王の御手にたよりて祈らうに……発矢、祈らうと心をば賺しても猶すかし甲斐もなく、心はいとゞ荒れに荒れて忍藻の事を思出すよ。心は人の物でない。母の心は母のもの。それで制することが出来ない。目をねむッて気を落付け、一心に陀羅尼經を読まうとしても（口の上にばかり声は出るが）、脳の中には感じが無い。「有に非ず。無に非ず、動に非ず、静に非ず、赤に非ず、白に非ず……」其句も忍藻の身に似て居る。

人の顔さへ傍に見えれば母はそれと相談したくなる。それと相談したとて先方が神でもなければ陰陽師でも無く、つまり何もわからぬとは知ツて居ながら猶それでも其人と膝を合はせて我子の身上を判断したくなる。それでまた例の身最負、内心の内心の内心に「多分は無難であらうぞ」と思ひながら変なもので、またそれを口には出さない。ただ其処で先方の答が自身の考に似て居れば「実に左様」とは信じぬながら不完全にもそれで僅に妄想をすかしして居る。世にいちらしい物は幾許もあるが、愁歎の玉子ほといちらしい物は無い。既に愁歎と事がきまればいくらか愁歎に区域が出来るが、まだ正真の愁歎が立起らぬ其前に、今にそれが起るだらうと想像するほど否に胸ぐるしいものはない。此様な時には涙などもあながち出るとも決ツて居ず、時には自身の想像でわざと涙をもよほしながら（決して心でそれを好むのではないが）なほ涙が出ることを愁歎の種として色々に心をくるしめることが有る。

だから母は不動明王と睨めくらで、経文が一句、妄想が一段。経文と妄想とがミドロシアンを争つて居る。処へ外からおとづれたのは居残ツて居た（此母の言葉を借りていへば）懶惰者、不忠者の下男だ。

「誰やらん見知らぬ武士が、たゞ一人従者をもつれず、此家に申すことあるとて来ておじやる。いかに呼入れ候ふか。」「武士とや。打捕はし。」

「道服に一腰ざし。むくつけい暴男で……戦争を経つらう疵を負ふて……」。

「聞くも忌まはしい。この最中に何とて人に逢ふ暇が……」。一度は言放して見たが、思直せば夫や輦の身上も氣にかるのでふたゝび言葉を更めて、

「さばれ、否、呼入れよ。すこしく間はうこともあれば」。畏まつて下男は起つて行くと、入代つて入つて来たのは三十前後の武士だ。

「御目にかゝるは今がはじめて。是は大内平太とて元は北畠の手の者ぢや。秩父刀禰とはかねてより陣中でしたしうした甲斐に、申残されたことがあつて……」。

「申残された」の一言が母の胸には釘であつた。

「おゝ如何に新田の君は愛でたう鎌倉に入りなされたか。」「まだ、扱は伝聞きなさらぬか。畢竟にあざむかれなされて、あへなくも底の藻屑と……矢口で」。

「それ、さらば実でおじやるか。それ詐偽ではおじやらぬか」。

「何を……など詐偽でおじやらうぞ」。

よもやと思固めたことが全く違つてしまつたことゆゑ、今更母も仰天したが、流石にもはや新田の事よりは夫や輦の身上が心配の種になつて来た。

「さては其時に民部たちは」。

「そのこと、まこと其事におじやるは。己が是から鎌倉へ行かうぞと馳行いた途、武蔵野の中ほどで見れば秩父の刀禰たち二方は……」。

「さて秩父たち二人は」。

「はしなくも……」。

「もどかはしや。いざ、いざ、いざ」。

「はしなくも敵に探られて、左様ぢや、其儘斫斃されて……」。

「こはそゞろ、……斫斃されて……発矢そのまま斫斃されて……」。

「その驚は道理でおじやる。己も最初は左様とも知らず『何やらん草中に呻いて居る者のあるは熊に噛まれた鹿ぢやらうか』と行いて見たら、おどろいたわ、それが那の二方でおじやつたわ」。

母ははや其跡を聞いて居られなくなつた。今まではしばらく堪へて居たが、もはや包むに包切れずたちまち其処へ泣臥して、平太がいふ物語を聞入れる体も無い。如何にも昨夜忍藻に教訓して居た処などは天晴豪気なやうに見えたが、是とて其身は木でも無ければ石でも無い。今朝忍藻が